自閉症児の療育・教育の課題と展望
ー　自閉症児が社会自立を実現するために　ー

佐々木　正美
(川崎医療福祉大学教授)

おはようございます。このたびこのようなセミナーを、国立特殊教育総合研究所が計画してくださったということを私は大変に喜びに感じております。御関係の国立特殊教育総合研究所長を初め、特に渥美先生ですね、該当部門の部長として御活躍の渥美先生には心からお礼を申し上げたいというふうに思います。

それにいたしましても、もしかしますと昨年だったでしょうか、寺崎先生がノースカロライナに３カ月訪問して勉強してくださったということも、今日こういうセミナーが開かれることになったきっかけであったかもしれないというふうに思っております。諸外国を訪問してみましても、どこの国でも言われることでありますが、保健省とか保健文化省とか、日本流に言うと厚生省とかというところの方が、はるかに早く TEACCH に関心を示し、そして自分の国への導入を熱心に図られますが、どこの国へ行きましても教育省や文部省は遅いということを親の会の人たちから、ペアレンツグループから聞きます。我が国の、いわば文部省がこういう機会をオフィシャルにお持ちくださったということは非常に大きな喜びです。特に私たちのこういう思いに１８年間、変わらぬ御援助をいただいているショプラー教授には、それから彼の仲間の TEACCH のスタッフの人たちには本当に感謝の言葉がないほど感謝しております。

きのう皆さんのお話と、それからそれに対する、諸先生方のきのうのお話と、それに対する御参会くださった皆さんの御反応を聞いていて、ちょっと私、お話をゆうべ考えておりまして、少し変更しようというふうに思ったりいたしました。ひょっとすると TEACCH モデルということに対して、本格的なその講義なり講演なりセミナーなりを初めて受講なさるという方もかなりおいでになるんではないかなというふうに思いました。それで少しノートにお示ししたのとお話を変えてみようかなというふうにも思っております。昨晩ディナーのパーティーで、日本自閉症協会の、この後、パネルでまたお話し合いに御参加くださいますが、須田さんがショプラー先生に、なぜ自閉症に取りつかれましたかというふうなことをお聞きになったんです。それに対してショプラー先生、いろいろお話しになっていましたが、その中で、私ももう随分長くから伺っておりますが、ショプラー先生の先生はシカゴ大学時代、ブルーノ・ベッテルハイムであります。驚かれるでしょう、これは。この話を聞かれますと。シカゴ大学の大学院でブルーノ・ベッテルハイムの教えを受けられながら自閉症の研究をされたと。信じられないことであります。先生の教えをこんなに守らない人というのはいないんではないかと思っているのであります。

自閉症理解の変遷

＜ショプラーの師、ベッテルハイム＞

ブルーノ・ベッテルハイムという人も日本では特に古い人の場合に、若い人はもう御存じない人もいると思います。忘れ去られようとしておりますから、若い人は御存じないかもしれませんが、古い人はよく知っていらっしゃると思います。自閉症という障害の原因は多分親だろうということを強く言われた人であります。親が自分の子どもに対して拒否的で攻撃的な感情を向けたと。それに対して子どもは親に対して、あるいは周囲の世界に対して心を閉ざしてしまったと。それがオー

ティズムであろうと、こういうことでありました。御存じのように、日本自閉症協会の前身の自閉症親の会全国協議会というのがありますが、その会の毎年出版されます機関誌のタイトルは、表紙は「心を開く」という本であります。自閉症親の会の人たちは、そういう専門家の言ったことを真に受けまして、心を閉ざしてしまったこの子たちの心を開かせようと、開いてもらおうと、こうされたわけであります。今日になれば、それは誤りであったということがわかりますが、自閉症協会はその歴史的な誤りもきちんと保存しておこうということが多分おありで、その機関誌の名前を変えないでおります。

＜「受容」の時代＞

親が拒否をし、攻撃をした結果できた自閉症ですから、今度は拒否の反対を、攻撃の反対をすればいいと。ですからブルーノベッテルハイムの著作を読みますと、子どもの行う行為はすべて受容されると。禁止されない。それどころか、こちらからはほとんど指示や命令もしないで、子どもの行為をあるがままに、そのまま受け入れて許容すると、受容すると、基本的にはそういう姿勢でありますね。それで自閉症の子どもたちは一見安定するようには見えます。一見安定はですね、それは当然でありましょう。そのままを放置される、あるいはそのままを受容されると。受容されるわけでありますから。けれども、そういう安定というものがどういうことになったかということは、多くの人がもう経験されてきたと思います。私自身も自分のスタッフたちが小児療育相談センターの時代のサイコロジストの人たちが善意を持ってですね、善意を持って本当に優しい感情を持ってそういうセラピーに熱心に取り組んだという時代を経験しております。

ブルーノベッテルハイムも古い時代にはそういう方法で成果が上がるということを、いくつかの論文に書いています。私たちもその論文に接しました。けれども、長い経過で見れば、それが成果がないということは今日明らかでありましょう。例えばセラピールームで安定した状態に一見なるということと、家庭でも安定した生活が送れるかどうかということとは別のものであります。あるいは、まして社会の中でどういう行動がとれるかということは、さらにもっと大きな違いがありまして、２４時間、３６５日、そのセラピールームにいられるんならば、そういう安定は安定で、それなりの意味を持つかもしれません、ある意味ではですね。けれども、そういうことがどんなにある意味ではむなしいものであるかということがわかったろうというふうに思いますし、ベッテルハイムの後継者はいないようであります。その施設も維持・継続はされてないようであります。

＜ショプラーの考え方＞

そこで教えを受けられたショプラー先生がどうしてかというふうに、皆さん、どうして今日のTEACCH プログラムをつくられたかということでありますが、私は以前ちらっとこう、何げない雑談の中で、ショプラー教授自身が覚えていらっしゃるかどうかわからないですね、もうショプラー教授自身が覚えているかどうかわからないような話を私はたくさん知っているのであります。その中でこんなことも言われたですね。自閉症の子どもたちと会っていると、この子たちは聴覚で情報を処理するよりは視覚で情報を処理する方がはるかにすぐれているということを、もう大変お若いころに、大学院の学生のころに気づいたと、気がついたということをおっしゃったように思います。私の英語が大変危ないものですから、ショプラー先生がおっしゃったとおりに伝わってないかもしれないのであります。そういうことがあったりしますのでね、私が言ったつもりのようにショプラー教授に伝わってないこともあり得るでしょうから、こういうすぐれた通訳の人を媒介にするのが本当はいつもいいわけでありますが、そんなふうに伺ったことがあります。そういうところからだんだんに自閉症の子どもたちの本当の姿を見

ていかれるわけです。そして、この人たちに合わせた治療・教育プログラムをつくっていかれるわけですね。

＜自閉症の人との相互理解に向けて＞

その中でショプラー教授がよく私にやっぱり言っていたように思いますが、自閉症の人に、あなたの周囲の世界にはこんなにいろいろの美しい意味があるんだと、そういうことを伝えたいと、こういうこともよくおっしゃったように思います。そして、私たちがお互いに皆さんと共有し合っているような意味とか文化とかいうものと、自閉症の人の感じ取っている、あるいは理解しているものの実態との間には大きなギャップがあるわけです。そのギャップにもさまざまな個人差がありますが、そのギャップを一つずつ丹念に、こちらの努力で埋めていくと。そしてだんだん自閉症の人にも努力をしてもらうと。まずはこちらからと。こちらから自閉症の人に近づいていって、こちらからそのギャップを埋めるアイデアを、あるいは方法をたくさん提供して、そしてそれを身につけて、だんだんこちらに近づいてきてもらうと、こういうふうなことを繰り返し言っておられたように思います。

ごく最近になって私は、ローナ・ウイングさんの「オーティスティック　スペクトラム」という本を横浜リハビリテーションセンターの仲間と翻訳をすることになりました。依頼を受けました。あなたもぜひ翻訳者の中に入ってほしいと、こう言われました。ローナ・ウイングさんという方はもちろんショプラー先生とも非常に親しい友人でありますが、彼女はすぐれた精神科の医者であると同時に、自閉症児のすぐれた母親でもありますから、彼女の感じるバランス感覚というのは大変すばらしいです。研究者はしばしば、自分の理論の正当性を非常に熱心に追求しようするんですね。ところが自閉症児の親であるという立場を持っていらっしゃると、本当にこの子たちに価値があるものは何かということを、自分の理論の正当性を離れて、やはり一方ではいつも考えておいでになるんですね。そういうことも私は東京で一度だけお会いしたときに聞きました。ですから彼女の本から学ぶものも大きいわけでありますが、彼女はその本の序文でこういうことを言ってましたですね。自閉症の人は自分自身を時間と空間の中にオーガナイズできない、こう言いました。キャン　ノット　オーガナイズ　ゼムセルブズ　イン　タイム　アンド　スペースと、こういうふうに言ってらっしゃったと思うんですね。時間と空間の中に自分を位置づけることができない、あるいは時間と空間が意味を持たない、あるいは持ちにくい、こういうふうに言い直していいと思います。

TEACCH モデルというのはこの時間の意味、空間の意味を自閉症の人に伝えるのにどんなに努力、工夫をするかということを、構造化のアイデアを皆さん聞かれて理解されたかと思います。ですから、時間と空間の中に自分を位置づけられないんですから、彼ら、彼女らの方から私たちが持っている文化、時間と空間を持った文化の中に彼ら自身の方から入り込んでくることはできないんだと。自閉症の人は我々の世界に入り込んでくることが、自分たち自身からはできない。だからこちらから自閉症の人たちに十分近づいてあげて、その近づき方にたくさんの工夫や創意、想像が必要なわけですが、こちらから自閉症の人に十分近づいてあげて、十分近づいてから、こちらに入ってくる道筋を一人ずつに別々に、微妙に違う一人ずつの道筋を発見、創造してあげなければいけないと。そうでなければ私たちと共存はできない、自閉症の人は。こういうことをローナ・ウイングは言っているように思います。けれども、実際の TEACCH モデルというのは、あるいは TEACCH プログラムというのは、こういうことを必ずしもそういうふうに言わないで淡々とやっているように私は思うんです。

ショプラー先生の後を受けて、今、ディレクターでいらっしゃるメジホフ教授は、TEACCH と

いうことは一言で言うとどういうことになりますかと私、お尋ねしたときに彼はこう言いました。意味のあるコミュニケーションをして、自閉症の人と意味のあるコミュニケーションをして共存しようとする、彼らと共存しようとすると。それがTEACCH モデル、TEACCH プログラムだと、こういうふうに言われたと思いますね。ずっと以前にショプラー教授が、あなたの周囲の世界にはこんなにさまざまな美しい意味があるんですよということを伝えたいと、こういうふうに言われたんですね。メジホフ教授はそれを、私は基本は同じことを言っていらっしゃると思いますが、あなたと意味のあるコミュニケーションをして、あなたと共存したいんですということを、自閉症の人一人ずつに問いかけられる。ローナ・ウイングは、時間と空間の中に自分自身を構造化できないでと、要するに我々のつくった文化の中に自分を位置づけられないで困惑している、混乱している自閉症の人たちに、このような筋道をこのようにこちらへ歩んでくれば私たちの世界に入ってこられるということをですね、まずこちらから十分近づいた後に示してあげる、こういう方法と、こう言われたんです。そのローナ・ウイングさんが、どんなに TEACCH プログラムのすぐれている面を知ってらっしゃるか、英国へ留学をされた人、勉強に行かれた人はそのことをちゃんと知って帰ってこられるようであります。

＜さまざまな方法の試行の時代＞

ここにノートを少し書きましたが、スキップしたいと、少し飛ばしてみたいと、こう思っておりますが、私たちがいわゆる親に対する不安から心を閉ざしてしまった情緒障害だというふうに自閉症児を考えた時代がだんだん終わって、その後、学習理論に基づいたオペラント条件付けの行動療法というものが大変もてはやされた時代がありました。私たちも東京大学の精神科のデイケアで仲間たちとこういう方法で一定の努力をしたことがありました。私たちのやり方自身が未熟だったからかもしれませんが、やっぱり自閉症の人に、私たちの世界と共存して生きる豊かな力を与えるのは大変でした。できなかったように思います。本当の意味では。ここのところを詳しくはお話をあまりしようと思いませんが、ロバースの論文なんかを一生懸命読みまして、ＵＣＬＡの、一生懸命努力をしました。東京大学の仲間たちと。で、必ずしもうまくいかなかったです。

きのうショプラー先生がミラクルというか、奇跡というふうなことでおっしゃった。あのとき私たちは統合教育に新たな活路を見出そうと、こうしていた、そういう時代がありました。この人たちを徹底的に受容して、例えばプレイセラピーなりをやると。それによってこの人たちの本当に世界が広がっていくかと、適応できる世界が広がっていくかというと、そんなことはありませんでした。それでは、適応するための、さまざまな環境への適応するためのスキルを身につけることができるように、単純にオペラントコンディショニングですね、行動療法をしたといっても、それで本当にその人の世界が広がるほどにいろいろなものの学習が進んだとも思えませんでした。随分と東京大学の精神科小児部のデイケアでは努力をしたんです。

そういうふうにいろいろな悩み、行き詰まりを感じている後に私たちは、統合保育・統合教育ということに活路を見出そうとしました。そして活路を見出せそうに思えた時期があったんです。今から思いますと、自閉症の人というのは毎日同じような一定の環境を提供しておけば、その場面だけになじむということは、いくらもあることであります。もっとわかりやすく言えば、その場面の意味が固定的に具体的に決まってさえいれば、もっとなじみます、自閉症の人は。

よく家庭の御両親が幼い子どもにもおっしゃることですが、トイレットとお風呂では自閉症児は混乱しない。後で物理的構造化のお話をちょっとしながら、そのことを触れようと思いますが、な

ぜかというと、あそこは目的が非常にはっきりしているところであって、ほかの目的に利用されない、応用されない場所だからいいんですよね。ですからそこへ行けばどういうこと、何があるかということが極めて具体的に同一的にいつも同じようにですね、固定さえしていれば、そこの場面で安定だけなら自閉症の人はすぐするんです。ですから、いつものセラピーのクリニックの部屋の雰囲気や様子を全く同じようにしておきさえすれば、自閉症児はそこへ行きさえすれば落ちつくということはあるわけです。

けれども、それが自閉症の子どもが発達したとか、適応力が増したとか、そんなことにはならないわけですが、それは統合教育の場面でもそうなんですね。私たちが映画をつくるときに、ビデオテープをつくるときにお願いした府中第三小学校の堀越先生というのは、普通学級の中でそういう雰囲気、状況をおつくりになるのが大変お上手だったんです。それはそれですぐれた力だと思います。ですから自閉症の子どもたちがその場面でなじんでまいります。通学するときにはいつも決まった何人かの子どもたちが誘いに行って、一緒に学校へ来ると。下校するときもこの数人の中の１人ないし２人がエスコートして帰ると。学校の授業は当然みんなと同じことはできませんから、その子だけに特別なカリキュラムを組んでやります。その子が授業が退屈したり混乱したりして、運動場へ飛び出して行けば、その子を迎えに行く生徒は決めておく。要するにいろいろなことをきちんと決めてあげさえすれば、自閉症の子どもにとってあまり予期しないことが起きない状況をつくっておいてあげれば、その場面では安定していくのであります。お掃除の当番にしろ給食の当番にしろ、決まったことを決まった手順でいつもやるようにするとすれば、そのことは習得します。身についてまいりますね。そういうことが次々どんどん重なってくることを、単純にそれだけで統合教育の成果というか、安定した状態での成果、発達というふうに私たちは思い込みました。

そういう状況の２年ないし３年ぐらいのプロセスを圧縮した映像をですね、初めてノースカロライナを訪問した１９８２年の夏にお持ちして、ショプラー教授や TEACCH のスタッフに見てもらった。ミラクルだと、一つのミラクルだとおっしゃった意味はそういうことであります、きのうですね。補足して御説明しておこうと思います。

そういうことがその子どもの、その少年の社会的な適応力、あるいは日常生活における能力・機能の発達を意味するかというと、そうではないんですよね。あのときあの映画の場面にいたあっちゃんという少年はもうとっくに成人でありますが、２０代の初めにですね、家庭や地域社会での生活が困難になって、とっても残念なことでしたけども、福祉施設に入所してしまわれました。ショックでした、それは。衝撃でした。今現在は、御家族がまた自閉症の子どもたち、あるいは青年たちと一緒に生活するための技術といいましょうか、知識といいましょうか、を新たに学習し直される、身につけられて、今は施設から家庭へ取り戻してはいらっしゃいます。そして安定した生活をまたしていらっしゃいます。けれども、そういうことであります。

そして、あのあっちゃんを教育をする、普通教育の中で、レギュラークラスの中で教育をする前に堀越先生は、Ａちゃんという子を、Ａちゃんと呼ばれる子どもを６年間、小学校１年生から６年生まで御自分のクラスで教育をされたんです。そしてそこでの経験を、あるいは括弧づけの成果と申し上げていいのですが、それを「Ａちゃんは一人ではない」という本にして出版社されました。ところが普通学級で６年間教育を受けたＡちゃんも、かなり早い時期に結局は施設で生活を余儀なくされていらっしゃるんです。普通学級の中で極めて安定した状態に見えて、先生も御家族もクラスメイトもそれを確認しているように見えてもですね、実際は何ができるようになったかという点

から見ますと、その場で落ちついていられるということは、混乱しないで、ひどく興奮しないで、かんしゃくやパニックに陥らないで、一見安定していられるという状態にはなったんですけども、実際には一般の社会ないしそれに近い状態、状況の中で生活をする技術を身につけることにはならないですよね。こういうふうなことを私たちはだんだん自覚をするようになりました。現実を知らされるようになりました。

<TEACCH との出会い>

そういう時期に、実は私たちは１９８２年に仲間１０人で TEACCH を訪問して本当にびっくりいたしました。本当にびっくりして帰ってまいりました。大きな衝撃でありました。大きな感動と喜びを持った衝撃でありました。行った仲間がだれもが興奮しました。１０人がですね。私たち普通ならば、行ってこういうことを勉強してきましたということで済むわけですが、こんなことを我々１０人だけで知っているというだけではもったいないということを仲間の１０人の人の多くが言いました。TEACCH の本当に１週間足らずのセミナーを受けて、ＶＴＲでいろいろなものを見て、教室を見学をして、グループホームを見学して帰ってきた。それだけのことであったのですが、その中で私たちはみんなが一様に言ったことは、今まで私たちはこちら側から自閉症を一生懸命見つめて、眺めていましたが、自分たちは初めて自閉症の人の側から世界を見ることができるような気がすると、こういうことを何人もの人が共通して言ったのです。いつもこっち側から自閉症の子は一体どういう子なんだろうというふうに見つめていたと、眺めいたと。ところが TEACCH のセミナーを、レクチャーを数日受けて帰ってきた、いくつかの施設を訪問して帰ってきた。それだけでですね、自閉症の人の方から世界を見るような気持ちができたと、こういうことを本当に多くの人が共通して言いました。きのうもそういうお話が少しありましたですね。少しそういう話が出たかと思います。

それで自分たち１０人だけでこんなことを知ってるというのではもう本当にもったいないから、もしかして TEACCH の人たちが日本に来て、レクチャーやセミナーをやってくれないものかと、頼んでみろというふうに仲間たちから私はそそのかされました、その場で、帰りに。それで私は、そんなことは無理だろうと実は内心思ったのでありますが、ショプラー教授に頼んでみましたら、じゃあ来年の夏に行きましょうと、こうおっしゃった、この気軽さにも驚きました。何人仲間を連れて行けばいいですかと、こんなこともおっしゃったんですね。本当に驚きましたですよ。これがそのとき日本で最初に行われたセミナーで、１９８３年の夏、東京でであります。そのレクチャーの全文が葡萄社から出ている「自閉症療育プログラム」というあの本であります。恐らく、TEACCH ということに関して世界で最初に出た本ではないかと思うんです。TEACCH の人たちは「ＴＥＡＣＣＨ」という本をお書きになりませんからね。外国人がみんな書いてはいますけど。そんなことがあったのであります。

TEACCH について

それで、TEACCH プログラムについて、やはりお話しをするのがいいと思います。そのものについて私が理解している TEACCH をお話しすることが一番大切かというふうに思って、少しそれをお話しをしようと思います。きのうからいろいろお話をお聞きになりました。２人の先生から直接お話を聞くということは、かなり TEACCH の基本を御理解なさったと思いますが、それでも日本人が日本人として理解した様子を聞いてくださることも、多分皆さんに、ちょっとまた違った理解の側面をお与えできるというふうに思うんです。

<構造化の考え方>

私は、１８年前に、ノースカロライナを訪問し

てから日本へ帰ってきて、TEACCH の構造化というアイデアをみんなに伝え始めましたら、当初はですね、ほとんどの人が誤解をされました。構造化、ストラクチャリングという言葉に、何か一定の堅苦しい物理的な枠の中に自閉症の人を閉じ込めて、こちらが管理しやすいように管理する方法だと、こう思ったようです。こういう誤解はその後長かったです。その誤解を解くことが大変でした。今でもまだ誤解をしている人もいると思います、一部には。率直に申し上げると、誤解し続けていないと自分のアイデンティティーが保てないという人もいらっしゃるようであります。本当に私は残念です、そういう人たちにお会いして、お話し合いをするときに。

一番わかりやすい比喩としては、構造化というアイデアのわかりやすい比喩としては、本当に目の不自由な人の点字ブロックを考えるといいですよね。それはもう典型的な視覚障害の人のための構造化です、点字ブロックは。その人たちの世界を広げるために考える方法でしょう。閉じ込めるなんていうものとはおよそ違うと思いますですね。あるいは車いすで生活をする人のために段差をなくしてスロープをつくるというのも車いす生活の人のための構造化であります。物理的構造化です、まさにですね。あるいは公衆電話の位置とか、エレベーターの中の押しボタンの位置を低いところに設置するというのも車いす生活の人のための構造化であります。それを、そういうアイデアを、自閉症の人のためにどのように工夫して与えれば私たちと一緒に生活しやすくなるかということを考えるのが構造化ですよね。でもなかなか伝わりません。というか、正しく聞かないでおこうとする人も一部にはいらっしゃるようであります。

後で本当にインフォーマルなとでもいいましょうかね、ビデオテープを見ていただきます。朝日新聞の厚生文化事業団がつくった、とてもいいＶＴＲが４本、５本あります。すばらしいＶＴＲです。多くの方がごらんになっていると思います。けれども、あれはいわばフォーマルな編集でありまして、それが TEACCH の実態を正しく伝えてないというんじゃないんですよ。それはもう正しく伝えているんです。けれどもですね、この後にお見せする素人が撮ったＶＴＲというのも、なかなかこれはインフォーマルな味わいがあるものでありまして、ごく平均的なグループホームの様子をごらんに入れようと思います。いろいろな教育の、いわばどうでしょうか、成果というか終着に近いところにあるわけですね。大きくなった、幼児期から小学校、中学校、高等学校と教育を受けてきて大人になった人がグループホームで生活をしている。そこを私たちが大変大勢で押しかけて見学をさせていただいて、しかもコミュニケーションをしているという状態であります。ごく平均的なそのグループホームを後で様子をごらんに入れようと思います。１９９７年に訪問したんです。その年は実に私たち大勢でありましてね、四十何人で訪問したんです。初めてです、そんなに大勢で行ったのは。１０人から２０人ぐらいが多いのでありますが、そんなときでありましたが、ごらんいただこうというふうに思っております。

＜自閉症の人の不適応行動＞

TEACCH というのは、実際に私たちの持っている環境、情報というものをどのように意味を共有し合いながら交換するかと、こういうことでありますよね。そのことが本当は実に大変なわけです。自閉症の人、きのうもお話がありました行動障害、不適応行動、よく言われます。行動障害とか不適応な行動を示すというのはどういうことなんでしょうか。場面の意味がわからない。そういうときに私たちは不適応ですね、その場面にですね。あるいは相手の言っていることの意味がこちらに伝わってこない。当然相手との間に不適応を起こします。当然ですね。今度は自分が感じたり思ったり欲求したりしていることを相手に伝えることができない。これも不適応でしょう。結局そういうことなんですよね、不適応ということは。

それがなければ不適応にはならないわけです。本当にならないんです。

きのうもちょっと申しました。私はこの１８年の間にノースカロライナ州を１３回も訪問させていただいています。長いときは６週間、７週間とありました。特にビデオテープを撮るときは長い滞在をいたしました。短いときは１週間ほどであります。１３回も訪問しますと、それはもう大変な数のクラスルームやグループホームや、時には自閉症児のお宅や職場やシェルタードワークショップやグループホーム、そういうところをたくさん訪問いたしますが、大きな不適応を示していると、混乱を示しているというような状況に出会ったことがないんです。恐らく日本の方も、もう１０人ぐらいの方は、あるいはそれ以上の人が１年ないしそれ以上留学していると思います。それから何百人という方が１週間前後の見学というか、学習に行っていると思います。その人たちが一度たりともですよ、自閉症の人がひどい混乱やパニックを起こしたのに出会ったことはないと思いますですね。だれもないと思います。一度見てみたいと思ったりしますよ。どうされるかということでですね。

実はですね、小さなエピソードに出会ったこと私、実はあるんです。こちらの都合でですね、それはもう朝日新聞の方とＶＴＲで取材をさせていただいているときに、ある高等学校の自閉症特殊学級にいる少女を撮らせていただいていました。その日のスケジュールが当然学校で伝わっているわけです。きょうはこんな人たちが来るということもちゃんと伝わっていました。ところが私たちの都合で、次の撮影の場面に予定よりちょっと早く行かなければならなくなって、ある場面を前後を入れかえて撮らせてほしいと、こう言ったんです。で、先生はスケジュールをちょっと直前になって変更されました。そうしたら少女は怒りました。当然かもしれません。ああ、この人たちも怒るんだと思いました。本当に思いました。ああ、怒るんだと思いました。リラックスしなさいと、深呼吸しましょうと先生が言っていらっしゃって、すぐおさめてしまわれて、これとこれとをこう入れかえましょうというふうにスケジュールを入れかえて、そして私たちにある場面を撮影させてくれたということがありました。

そういう問題の、もっと我々にとっては無神経なね、無計画な状態を日々漫然と与え続けたら、多分この人たちはどんどん不適応を示していくようになるでしょうね。というようなことを思われませんか。そのために、TEACCH は、例えばきのうもお話がありましたですね。物理的構造化というふうにですね。なぜ物理的構造化をするかと。場面の意味を正確に、環境の意味を正確に伝えるためですと、こう言います。そうですよね。私たちはそのことを教えられるまではですね、自閉症の人は、あるいは自閉症の子どもたちは、一つの場面が意味を変えるということさえわからないということを知りませんでした。あるいは一つの場面が多様な意味を持つということさえわからないと、最初のうちは。そういうことも知らなかったです。

どういうことかといいますとですね、教室という部屋がチャイム一つで休み時間になるということは、そこは遊び場に変わるということです。自由遊びをしてもいい場所に変わりましたと。ところが次にチャイムが鳴ると勉強をする場所に変わりましたと、こういうことです。ですから、ワークスタディーエリアからプレーエリアに変わり、プレーエリアからワークスタディーエリアに変わると、こういうことでしょう。同じ場面が。意味を変えるわけですね。恐らく皆さんはそんなこと当たり前に何とも思わないで考えているでしょうけども、自閉症の人にはわからないわけです、それが。ということがわからなかったんじゃないでしょうか。あるいは教室でさまざまな子どもたちに不適応を起こされて戸惑っていらっしゃる先生方は、例えばそういうこともわからないでいらっ

しゃるかもしれない。いかがでしょうか。

＜不適応を起こさないために＞

ですから、一般の家庭でトイレットとお風呂場で自閉症児は混乱しないという理由の最大の理由は、一つの場所が多目的に使われないからであります。ですから、教室の中で一つの場所を多目的に使っても混乱を起こさないということが確認できるまでは、あるいは混乱を起こすという生徒がいる間は教室をいろいろな仕切りをつけたり、カーペットの色を変えたり、視覚的に目印をしっかりして、ここから向こうは何をするところ、こちらは何をする、別のこういうことをするところと決めてあげればいいわけですね。よく言いますよね。一つの場面と一つのアクティビティーと、活動と。ここは何をするところというふうに１対１の関係ではっきりしてあげればいいと、こういうことです。

きのうのお話の中で十分そういうことをお感じ取れた方はいいです。でも、そうでない方もいらっしゃったようでありますので、このように補足をしておきたいと思います。一つの場所が一つの目的のためだけに、一つの活動のためだけに用意されていれば、自閉症の子どもたちはそのことをすぐ理解します。そこへ行けば何をするところ。例えば勉強するところ、スタディーエリア、ワークエリア、自由に遊んでもいいところ、プレーエリアと呼びますね。中学生ぐらいになるとブレークエリアと呼んでらっしゃいましたが、休息をする場所、遊ぶ場所、おやつを食べるところ、昼食を食べるところ、フードエリア。例えばですよ。何でもそういうふうにはっきり決めてあげさえすればいいわけです。そうすれば意味がしっかりつくわけです。

自閉症の人と、自閉症の人にとって、あるものとある意味とというか、いうようなものがこんなくっつき方を１対１でぴったりするんだなということは、多分皆さんはですね、たくさん日々の自閉症の子どもたちへの教育や治療をなさる過程で知っていらっしゃるでしょう。愛育研究所の友人がですね、かつてこういうことを私に話したことがありました。ある自閉症の少年が空間をじっと見つめていると。見ている先には電線があって、そこにスズメがとまっていたと。ですからその先生は、あれはスズメというんだよと教えたと。スズメ、スズメと何度も教えてあげたと。そうしたらその子は「スズメ」というふうに口ずさんだと。ああ、わかったと思ったと。ところが、後日わかったことはですね、彼は電線を見ていたらしいんです。ですから以来、線を見ると「スズメ、スズメ」と言うようになったと、こんなことがありました。訂正するのがとうとうできなかったと言っていました。こんな結びつきさえしてしまうわけですよね。こういう結びつきしかできないみたいなところも一面ではあるんです。

＜テンプル・グランディンの「ドッグ」＞

きのうショプラー先生がテンプル・グランディンさんという人を挙げられました。コロラド大学で大学教授をしていらっしゃる人であります。畜産学とか動物科学とかお詳しい方でいます。昨年の夏に私はテンプル・グランディンさんと講演会をやったんです、東京で。おいでくださった方もいらっしゃいましょうか。国際治療教育研究所、藤井ﾉﾘﾕｷさんという人がいらっしゃって、何かやるたびに私を引っ張り出されるんであります。テンプル・グランディンさんと初対面でありました。いろいろなお話を聞きました。こんなことをおっしゃいましたよ。子どものころにですね、お母さんがドッグ…犬ということですね。ドッグと言うと、「ドッグ、ドッグ」という声がお母さんの声から聞こえますとね、今から思えばこういうことだったと。お父さん、犬の何とかを散歩に連れて行ってください。そしてこのテンプルも一緒に連れて行ってあげてください、こういうことであったと。あるいは今度はですね、お父さんがいないときに「ドッグ、ドッグ」と音が聞こえると、お母さんが何とかいう名前のドッグを連れてね、散

歩に行きますから、テンプル、あなたもついていらっしゃいと、こういう意味であったと。そのことに関してテンプル・グランディンさんは何を感じたかというと、ドッグという言葉は外出を意味することだと思ったらしいんです。ドッグはですね。だから自分は外出したくなるたびに「ドッグ、ドッグ」と叫んでいたと。だけど親はちっとも理解してくれなかったと、こういうことを言ってましたですよ。こんな結びつきもするんですね。

＜困難な言葉の意味理解・学習＞

こういう誤解がないように、正確に物事の意味を伝えていくというのはとても難しいです。そして、しかも一つのものに多様な意味をつけるとかいうようなことが難しいんであります。テンプル・グランディンさんがこう言われましたね。自分は自分の国の言葉を第２言語のようにして学んだと、こう言ってました。第１言語は映像だと。わかりやすかったです、これは。私も英語が第２言語なんです。大変です。覚えるのがですね。読んだり書いたりする方はまだいいんですけども、聞いたり話したりするのが大変であります。目の方がずっと楽ですね。テンプル・グランディンさんは仲間たちを見ているとですね、仲間たちがフランス語やドイツ語やラテン語や、第２言語を学ぶようにして、自分は自分の国の言葉を身につけてきましたと、こう言っていました。なるほどと思いました。

第１言語はピクチャーなんです。映像をつなぎ合わせて自分は物を考えていると。ですから２冊目、日本でも翻訳された本は「シンキング　インピクチャーズ」という本ですよね。絵で考えますと。日本語の翻訳の題名は自閉症の才能開発となっていますけど、本来の意味はシンキング・イン・ピクチャーズという、ずっと御本人の意図するところの意味がしっかり込められています。言葉で考えることはとても苦手ですと。自分は絵で考えるんですと、もう冒頭からそういう言葉で始まりますね、あの書物は。テンプル・グランディンさんの言っていることを、本当に TEACCH はですね、ずっと前からもうわかっていたみたいですね。びっくりします。TEACCH プログラムを、その TEACCH モデルをある程度理解された後にテンプル・グランディンさんの本を読まれると、本当によくわかります。テンプル・グランディンさんが言うことがよくわかります。いかに視覚的に物を理解し、考えていく性格が強いかということが本当によくわかります。ですから、映像化しにくい言葉というのはなかなかその意味を持たない、こういうふうに言っていました。

本の中にも書かれてますし、彼女も言ってましたが、私は本当に話を聞いてびっくりしたのは、クイックという言葉がありますね。英語でクイック。速いとか、クイックリーは速くという意味ですね。ところがアメリカには、私は知りませんでしたが、ネッスルというコーヒーや清涼飲料水などをたくさん製造・販売している会社があるんだそうですが、そこにクイックという清涼飲料水があるそうであります。本当でしょうか。クイックというね。クイック・リフレッシュメントというような意味合いがあるんでしょうか、クイックというのはね。ですから、テンプル・グランディンさんは、クイックという言葉を聞くと速いとか速くとか、クイックリーとかというようなイメージはまず最初にわいてこないんですね。そのクイックのボトルとか缶が頭の中に浮かぶんだそうであります。ですから、彼は速く走っていると、ヒーランズ　クイックリーという言葉を聞きますと、クイックという清涼飲料水を持ちながら走っている子、そういうイメージに瞬間なるんだそうです。もう相当能力が高くなっていろいろなことがわかっている人なんですね。それから、そんなはずはないと思って、速く走っているんだとかいうふうになるんだそうですよ。

上とか下という概念は非常に難しいかったと、身につけるのが。あいまいですから。どういうようにしてわかったかというと、小学校の何年生ぐ

らいだったでしょうか、学校で避難訓練があったときに、アンダー　ザ　デスクというのですね。机の下に…アンダー　ザ　テーブルでしょうか、とにかく机の下に早く避難しろといって、無理やり押し込められたと、机の下にですね。そのときにアンダーということがこういうことかなあというふうにわかり始めたと。わかり始めたので、わかったんじゃないのであります。そういう記憶もしっかり持っていらっしゃるようであります。大変なんだそうでありますよ。アンダーがいつも下で、オンとかオーバーが必ず上でというふうにはならないわけですよね。机の上と…よろしいですか、皆さん、天井の下だったら天井の下の方が上にあるんでありますから。こういうのがとにかく困る。わけがわからなくなるんだそうです。ロミオとジュリエットの悲しみというのは自分にはどうしても理解できないことだと、こうおっしゃっていました。

＜予期できないことのつらさ＞

今でもと言っていられたですね。予期しないことが起きるということはとてもつらい。恐らくあなた方とはね、違った不安、恐怖を感じるということもおっしゃっていました。TEACCH がスケジュールを強調するということの意味はわかりますが、今でもです。ですから、日本へ来るときもそうだったそうですが、もしあそこで飛行機が予定どおり飛ばなかったらどのルートにしようかという、代替ルートをいくつかちゃんと用意してからでなかったら旅に出られないと、こう言っていられたです。私たちはその場で考えればいいと、こう思って出るんでしょう。どこかで飛行機が予定どおり飛ばないということになったら、それはそのときはそのときだみたいです。自閉症の人は、そのときはそのときだなんていうふうにはとってもいられないそうであります。

例えば TEACCH の人たちからこんなことも学びました。自閉症の人は自由時間を過ごすのは難しいと。いつまで一体何をしていればいいのかがわからない。しばしば不安と苦痛の時間ですと。ですから、クラスルームを担当している先生たちの中では、学科を教えるより作業を教えるより、しばしば自由時間の過ごし方を教えるということを最初に大切にするという先生もいます。恐らくいわゆる自由時間、私たちから見れば自由時間のように見えますが、実際は放置する時間、ほったらかしにする時間ですね。その時間が漫然とたくさんあればあるほど自閉症の人は不適応行動が大きくなり、不適応行動が定着していくと、こういうふうなこともありますよね。こういうことも皆さん、知っていらっしゃいましょうか。ですから構造化ということは、場面の意味がよくわかって、相手の言うメッセージがよく理解できて、こちらから言いたいことを相手に自由に伝えられて、自由時間も自分のプランで楽しく過ごせるという人にとっては構造化ということの実感は伝わってこないかもしれませんが、そうでないときちょっと考えてみるといいと思うんですね。

＜外国旅行における「構造化」＞

よく私は自閉症児のお母さんとおしゃべりをしながら構造化ということについて、言葉がよく通じない、あるいはそこの国の社会の人々の感情がよく理解できない、あるいは風俗・習慣・文化がよく理解できない、というふうな外国へ旅に出るというふうなことがあったときのことを考えるとわかりいいと思うんです。私たちも皆さんも自閉症の人とは違って好奇心が旺盛ですから、いろいろな国へ行ってみたいと思うと。行ってみたいとは思いますけども、コミュニケーション・ハンディキャップを外国では持ちますから、コミュニケーションだけではなくて、いろいろなものに対する理解を私たちは十分できない、表現ができないということがあらかじめ予知できますのでね、初めて外国旅行をなさるというようなときには、よくパックのツアーにお入りになるでしょう。あれは構造化でありますよ、皆さん。構造化ですよね。見事な構造化でしょう、スケジュールをしっかり

教えてくれて。パックの中に入っているから、とても安心して、安定して旅行ができますが、どこかの空港に着いた途端に自由にしてくださいと言われたら、こんな不自由なことはないというのはおわかりになると思うんです。どうでしょうか。空港に着いて、さあ皆さん、これから自由ですよ。１週間後の何時にこの空港でまた集まりましょうと。どうぞ御自由にしてくださいと言われたときの不自由さをちょっと考えてみてくださるといいと思うんです。そういうときに私についてくる人はどうぞついてきてくださいということをですよ、ツアーガイドの人がおっしゃると、その人の後をついて行くんですね。スケジュールなんかくださったら最高でありますよね。きょうはどこのホテルに行きます。私の後をついてくればどのバスに乗ってどういうふうに行きます。ホテルに着きますと、きょうの夕食は何階で、このチケットを出して自由に食べてください。日本人の味覚に合いそうなものをちゃんと注文してありますから、安心ですよと、こうおっしゃる。明日の朝はこの青いチケットで、今度は何階のレストランで出すと、大体また日本人の味覚に合いそうな朝食が出てきます。何さんは１人部屋が欲しいとおっしゃったので、１人のお部屋をとりましたと。何さんと何さんは２人で共同の部屋で過ごしたいとおっしゃったので、ツインの部屋をとりました。こういうふうに言っていただいて、かぎをもらって、明日は朝食が終わった後にどこどこの名所・旧跡を見に行きますから、スニーカーか何かで軽装をして、ロビーに何時に集まってください。私がこの旗を立てて待っておりますからと、こういうスケジュールを一部始終言われると生き生きと活動できますね。お好きになさってくださいと言われたら生き生きできなくなる人もいると思うんです。こんなふうなこともひとつ自閉症の人を考えるのにわかりいい例だなあというふうに思っております。

あるいは、皆さんの中には舞台でいろいろなドラマを演じることが好きな人と苦手な人がいるかもしれません。私はもうとても苦手であります。だからこういう比喩をよく挙げるんでありますが、脚本を渡されて、脚本を丸暗記して、そしてほかの人の言葉のやりとりを何回か練習してすっかり身につけて、それで安心だといって舞台に出て行きます。相手が全然間違った別のせりふを言ってしまったら、私は大混乱を起こしますね、そこで。あるいは自分が舞台で何かを演じていると。この動作ないしせりふが終わった直後に下手（しもて）からだれだれが登場して、私にどんなアクションを起こすと。こういうことが予定どおり筋書きにありましたと。ところがそのときにその人が出てこないと。そうなったら私は舞台の上でパニックになります。どうでしょうか。ところが舞台慣れしている人であれば、そこで多少の追加のせりふを自分でアドリブで考えて、あるいは動作、しぐさをあれこれ上手にして、観客には何も不自然さを与えないで、ちょっとおくれて出てきた登場者とまたうまくやっていくでしょう。ところがそのちょっとおくれて出てくるまでの間を私は立ち往生してしまって、混乱をして。もしかしたらもう投げ出して、舞台の陰に、幕の中に入ってしまうかもしれませんですね。こういう混乱であります。

こういう種類の混乱を自閉症の人は日常生活の中でやってるなあというふうなことも、TEACCHを学んで思うようになりました。ある意味では、いろいろなことがうまく学習できて、あるいは自閉症という障害がやや軽くてというふうな人の場合には、今のようなアドリブは多少平気でしょうね、日常生活の中で。ところがあえて言いますが、重い自閉症であるとか、自閉症でなおかつ知的障害が深刻であるとか、あるいは認知機能その他がよく改善していないとかというようなことがあればですよ、舞台慣れしていない者が無理やり舞台に出されて、そこでみんなとドラマを演じてるみたいなところがあるわけです。スケジュールとか予定どおりとかということがどんなに大切かと。

そのことはテンプル・グランディンさんのように、あなたはもう自閉症だと言わなくていいでしょうというふうにショプラー先生が言っても、いや、私は自閉症で、やっぱり自閉症として生きていきたいと、こういうふうに言われたという。あの高機能の自閉症の人でさえですよ、予期しないことが起きるということがどんなに苦痛なのか、つらいのかというようなことを私たちに教えてくれるんですね。私たちが感じる予期しないことが起きたときの当惑と質が違うかと思うほど、やっぱり深刻なようであります。

構造化ということは、ですから、物理的構造化ということととかスケジュールの構造化ということの意味が、こんなふうなところから理解していただけるといいなと思っているんです。なぜ自閉症の人にこういう構造化をするのか。枠の中に閉じ込めるとか、管理しやすいように構造化をするとかというようなものとはおよそ違うんですよ。だけどそういう誤解をしている人たちに向かって、会うたびに一々こういう長い話をゆっくりできないんであります。大変なんであります。でも本当はそういう意味なんです、皆さんね。私たちだって自分が安心して柔軟に適応していく力を持ち得ないような状況や場面になったら、どうしたって私たちは構造化というものを用意してもらって、そこで安定した生活を送るしかない、あるいは旅行を楽しむしかないということもありはしませんか、皆さん。

いつか私は、ノースカロライナ州に本当に行くときに、成田の空港でシカゴへ行く飛行機を待っておりましたら、近畿日本ツーリストという有名な旅行会社がありまして、大勢の、かなりお年寄りでした、かなりの年配の方たちを外国旅行に集団で引率しようとしていらっしゃったんですね。ロビーで相手の国の、最初にシカゴの空港に着いたら税関の手続がありますということを言ってるんですね。税関だけはですね、みんな一人ずつ済ませていただかなくちゃいけないと。私が同席することができないと。家族は一緒に通過することができるけれども、それぞれ一人ずつ、決まりになってますからと。そしたらある初老の方が、相手の税関の人は日本語を話してくれますかと心配そうに言ってましたが、それは話さないと思いますとおっしゃった。それじゃ困りますとおっしゃったわけですね。そこでその近畿日本ツーリストの人が思案してらっしゃって、じゃあ皆さん、こうしましょうと。何を聞かれてもいいから、サイトシーイングということにしましょうと、こう言われたんですね。サイトシーイングってどういうことですかと、観光という意味ですから、何でもいいですから、サイトシーイングと片仮名で書いて覚えてくださいと。何を聞かれてもサイトシーイングと言えばいいと、こう言っていらっしゃるんです。高額のものを持ち込んでいませんかと聞かれても、言ってみればですよ、サイトシーイングだと。例えばであります。相手の質問と全然見当違いのことを答えれば、ああ、この人は英語ができないということがわかりますから、多分そのまま通してくれるでしょうと、こうおっしゃった。そこで混乱が起きて、税関のスタッフの人が何か言えば、そういうときには私がお手伝いに行けるかもしれないと、こういうことをおっしゃってました。なかなかこれは見事な添乗員の方だと、ガイドさんだと思いました。それはそうですよね、もう高齢の方を集めて日本から外国旅行するというようなときに、もうどうしようもないですもんね。見事だと思いました、それは。で、そういうふうに、もうそこを通過するときの通過の仕方を極めて具体的に形式的に教えてもらえば安心して通過していけると、こういうことになりますよね。

＜構造化による不安の軽減＞

そういう生活のノウハウみたいなものを、例えば私たちが非常に適応しにくい、自由に柔軟に自己実現しにくい状況や環境をどう生き抜くかというようなときに構造化の意味というのはね、ある意味ではとてもわかりやすいですし、どんなに必

要なことかということもおわかりになるだろうと思うんです。そして、一つの場所を多目的に使ってももう平気だというふうになれば、どんどんどんどん、それは一つの場所を多目的に使えますし、予期しないことが起きることに対して当惑も混乱もしなくなれば、そんなにスケジュールをがっちりし過ぎないということももちろんやりますし、あるいはですね、予定しないことがきょうはあるかもしれないというようなことを練習するということもしていらっしゃったです。

ある教室に行ったときに、この時間には何があるかわかりませんということをですね、予告してあげるんです。ノット・エクスペクテッド・タイムとかアンエクスペクテッド・タイムと、こんなふうにおっしゃっていました。ああ見事だなと思いました。この時間には何があるかということをまだお知らせしませんと、こういう時間です。最初は子どもたちが、生徒たちが喜びを感じるような時間にするんだと。予定しない時間に急に何かをするときに。で、だんだんハードワークの時間なんかもそういうところに入れていくというようなことを工夫している先生もいました。とにかく非常に創意工夫が豊かであります。さらに私は、最初のころに TEACCH を訪問したときに TEACCH のスタッフが言われた言葉で忘れられないことがあるんです。だれかがですね、先生、あなたは日ごろ子どもたちを教育しているときにどんなことに注意をしますか、というようなことを何気なく聞いたときに、先生は、失敗させないように注意をしてるんです、とこう言われたです。これはとても大切なことであります。失敗させないように常に注意をしてしていると。私たちは許容とか受容とかと、いろいろ言いますけども、こんな配慮というのは大変なものですよね。失敗させないようにしてあげると。ということはですよ、その人の機能レベルを、機能の内容をよくこちらが熟知してなければ、どういうことではミスするだろうと、混乱するだろう、失敗するだろうというようなことが予知できないですから。失敗させないように教材を整える、課題を与えると、環境や状況を整えてあげると。多少の失敗には耐えられるようになっていく様子を見ながら、多少本人の能力を超えるというようなことを、ある時期から与えることはあるかもしれませんが、こちらが相手に対するイバリエーションをですよ、アセスメントをいいかげんにしておいて混乱を引き起こしてるというようなことはしないのであります。そしてだんだんだんだん発展、広げていくんです。

＜一般社会における環境の構造化に向けて＞

こんなに用心深くやったら一般社会は、よく日本で私はこういう質問を受けるんです。こんなにですよ、用意周到に入念に教育をしたら、一般社会の人々は彼らにこんなに用意周到に入念に対応してくれないから、社会適応できない人になるでしょうと、こんなことを言う人がいます。とんでもないことですよね。だんだんそうやって広げていくんです。正しく教えながら一般社会で生活をする練習をしていくんです。床屋さんに１人で行くためにはどうしますか。例えばであります。床屋さんに行くファイルというのを持ってる青年に会ったことがあるんです。こういうファイルがありましてね、こちらのページに左のピクチャーのように整髪してくださいと、こう書いておいてあげる。あるいは美容セットをしてくださいと、女性の場合に書いておいてあげる。で、こちらに彼がこういう髪形にしたいと思う髪形をしている人の写真を張っていくわけですね。映画雑誌やいろいろなものからこう切り抜いて張っていくわけであります。時には無理難題もあるというふうに床屋さん、おっしゃるそうでありますが、こういうふうにしてくださいと。自分で言えなくても。学校で教育で教えるべきことは２０～３０分整髪台の上でちゃんと静かにしていると、こういうことです。教室で床屋さんの練習をする人もたくさんいます。そして最初の何回かはだれかが同席する、同行するということもします。ある時期からは自

分１人で行く。例えばこんなこともあります。このようにしてですよ、それは確かに用意周到です。最初はだれかが付き添うということがあります。だけどそういうふうに教えていくことによってしか床屋さんを利用できるようにはなかなかならない。自分１人でですね。で、その床屋さんには、こういう青年への対応の仕方を TEACCH のスタッフはお願いに行くんであります。美容師とか理容師の人たちにですね。それはそれはもういろいろなことをいたします。

ある青年がある職場に通う。シェルタードワークショップに通う。ある職場に通うと。あるいは何かの用事に定期的に通うためにそのバスを利用するというようなことがあったときにですね、路線バスのどれに乗っていいかということがよくわからないようなときに、その青年の目印になるものをバスに張ってきてもらうというようなことをバス会社と話し合ってと、こういうところもありました。それはもう本当に見事なものだと思いますよ。社会がそんなことをしてくれませんなんていうんじゃなくて、してもらうんであります、バス会社と交渉して。日本の自動車の初心者の人が双葉マークを張って、あれと同じであります。ああいうものをこの青年１人のために張ってきてくださいと。この時間帯をそちらへ行くバスには前面にこのことを張っておいてくださいと。するとそれが張りつけられたバスが来れば、その青年はそのバスに乗ればいいんだとわかるわけでしょう。社会がしてくれないというようなことを言っていなくて、してもらうんであります。そして自閉症の青年たちにいろいろこう伝え得た範囲内で社会資源を利用しながら、だんだんだんだん適応力を広げていくんであります。

ですからノースカロライナ州を訪問した日本人だけではありません、アメリカのほかの州の人とか、それから諸外国の人とか、時々行き合うことがありますが、彼らは、ノースカロライナ州の自閉症の人は、自分の国の自閉症の人たちよりも人なつこいと、こういう言い方をします。今度グループホームの映像をごらんに入れますが、どんなふうにお感じになりますか。人を恐れてないんですよ。わけのわからないことを言わない、苦痛を感じさせない、理解できるようにいろいろなことを伝えてくれると。こういう経験をずっとしてる、失敗をさせない人たちとかですね。そういう用意周到なことをすることがですね、しばしば日本の社会では無理だとか、あるいはそんなことをしたら、かえって一般社会はそうではないんだから、適応できない人をつくってしまうとかというようなことを本当に思いつきでね、衝動的におっしゃる人がいるんですね。そんなことは全くありません。ある程度以上高機能の人はどんどん自立した生活をしてます。本当にしてますですね。保護の必要な人はさまざまな保護をしていると。それはそうであります。そして、その機能レベルに合わせた地域社会での生活をしているわけでありましょう。

＜構造化は自閉症にとってのバリアフリー＞

結局、構造化ということは、私は今日、バリアフリーということと同じことだと思っています。別の表現をすればバリアフリー。自閉症の人に対するバリアフリーです。車いす生活の人のバリアフリー、視覚障害の人のためのバリアフリー、聴覚障害の人のためのバリアフリー、みんないろいろあるわけですね。自閉症の人のためのバリアフリーを TEACCH の人たちは構造化という表現でするんであります、至るところに。だけど、障害者にとって１００％完全にバリアフリーが達成された領域というのはないと思いますね、まだ、残念ですけど。まだまだでしょう。視覚障害の人も難聴の人も、聴覚障害の人も車いす生活の人もですね、相当…少しずつはバリアフリーになってきましたけども、まだその発展途上だというふうに言ってもいいかもしれませんが、バリアフリーというふうに言いかえるとわかりいいのかもしれません。日本人的な感覚としては、いかがでしょう。

構造化ということはですね。

＜社会生活に向けて

－TEACCH の考え方－＞

そして TEACCH の人たちは、そういうふうな教育をしながら、私たちに、私たちのこれからの課題だというふうに教えてくれることの中で、私はこんなことをいつも思います。いいことだなあと思うのは、学校教育が終わりそうになりますと、もう高等学校の生徒の教育をしている先生は絶えず考え始めるようであります。おしゃべりしてますと、この子は学校を、教育を終わった後にどこに住むかと、こういうことをまず念頭に置きますね。居住です。そのまま引き続きかなり長い間家族と生活を一緒にするのか、グループホームのようなところに移るのか。高機能の人になりますと、グループホームから今度は自立、アパートの方に移っていくか。いずれにしろ居住ということをひとつしっかり考えます。どこで住むかということですね。それからどういう仕事を日々するかと。どういうレベルの仕事をするかと。それからどのような余暇活動をするのかと。余暇活動を身につけるということですね。この３点セットとでも我々は呼んでいいと思うんですが、居住と就労と余暇の過ごし方、余暇活動ですね、この３点セットをいつも考えながら、学校教育の終盤に差しかかると教育をしていくということをよく言われます。この三つのバランスがとれた生活がいいんですよね。皆さんはいかがでしょう。どこに住んで、どういう仕事をして、どのような余暇を、余暇活動を楽しんでいらっしゃるかと、こういうことであります。実際、ノースカロライナの自閉症の人は成人に達した人、成人の人の９５％を超える人が、家庭とグループホームを生活の基盤にして地域社会で生活しているんです。そのごく平均的なグループホームを、もう編集も何もできない素人が撮った映像でごらんに入れます。こういうところで TEACCH のある一端をごらんいただけるかと思いますね。インフォーマルな映像であります、言ってみれば。どうぞ、それじゃあちょっと見ていただきましょうか。

TEACCH の実際
－ 見学して －

これは、こんなにたくさんで行ったんですよ。これ半分に分けてこんなだったんです、見学者を。混乱されなかったです。私たちは心配しながら行きました。この方たちは居住者です。一体どっちにコミュニケーション障害があるか、どうぞごらんください。自閉症の人に話しかけられたりしてしまうわけです。こうやってやってくるんでよね、どんどん。みんな人のそばにこうね、とても人なつこく寄ってくるんですね。でもとてもいいコミュニケーションだと思いませんか、日本の人と。この年は大変大勢の人で行きまして、これで二つのグループに分かれてね、あとの半分の人は別の施設を訪問してるんです。この方は通訳してくださっている方です。少し早送りをしていただけますか。

＜グループホームでの視覚の活用＞

こういうお話し合いもいいんですが、グループホームの…ちょっとこの辺で結構です。スケジュールとかいろいろなものが各所に提示されてます。これはグループホームのスタッフですね、この方は。こういうビジュアルな指示といいましょうか、情報の提供がたくさんいろいろな形でなされています。いかに視覚情報を上手に使っているか、自分の気持ちをね、この絵で伝えるんだそうですよ。私は今うれしいとか、怒ってるんだとか、悲しいんだとかで。そういうことが可能な人もいるそうです。私の今の気持ちはこれだというようなことをね、言う人もいると、こういうことでありました。これ、おもしろいですね、本当に。僕の今の気持ち、私の気持ちは今こうなんですよと。ディプレストというのがありましたね。こんなに飾り立ててある部屋があったりもしました。これ一人

の人の部屋ですよ。ユー・ハブ・ザ・ライトとありましたね。あなたにはこういう権利があるということでしょうね。こんなにたくさんのことが用意されて、まさにピクチャーディクショナリーと言えると思いますが。

参加者が、素人が撮った映像ですから、よくないかもしれませんが、雰囲気が伝わればと思います。朝日のプロが撮った映像とは随分違いますしね、撮り方が違いますけど。ある高さばっかりダーッと撮って、あそこら辺にいろいろな私たちが学ぶべきものがたくさん展示されているので、カメラの視点はいつもそっちへ行ってるんだなと思いました。その人がつくって、つなぎ合わせたものですと言って贈ってくださったんですけど。

このＶＴＲの最後の方には、実はショプラー先生のお宅でごちそうになったときの映像なんかもあるんですが、ショプラー先生のお宅を訪問してみましょうか。どう思われますか。少し早送りをしていただけますか。これは何でしょう…そうですね、もう早送りをしてください。大体雰囲気がおわかりになったでしょうから。ずうっとこういうふうにして見ていただいていて。ちょっととめてみていただけますか。

＜ショプラー先生の自宅＞

これはショプラー先生のお宅ですね。これは自閉症の子どもがかいた絵ですか。これショプラー先生のお宅です。お宅を訪問したとき。奥様ですね、向こうの方から出てこられた。これはショプラー先生のお宅の庭です。庭というよりもう林、森ですね。広大な敷地というか、本当に広いです。牧場もありますしね。チャペルヒルセンターのセンター長の奥さんはですね、リー・マーカスさんの奥様です。これ、この方が。これショプラー先生のうちのお宅の中ですよ。道があったりするんですよ、ああいうふうにですね。もうこれ全部先生の、日本流に言うと屋敷になります。どこまでがそうなのか、ちょっとわけがわからないです。これ先生のお宅の馬です。馬を飼っていらっしゃる目的を伺ったことはありませんでしたが。これ先生のお宅なんです、ずうっとですね。こういうところに住むとアイデアが浮かぶのかもしれませんね。これはたしかね、古いアメリカ原住民の人が建てた非常に頑丈なうちだというふうに伺ったでしょうかね。先生のお宅の中にあるんです、こういう。それでね、今、医学生のために貸してあげているとおっしゃってました。医学生のためにですね。こういうのは普通に勉強に行ってもなかなか見られないところですので。私も初めてです、ここは。大きな池もありましてね、ナマズなんかいっぱいいて、簡単に釣れて食べられるんですよ。東京からウナギの照り焼きというんでしょうか、かば焼きのたれを持って行ってね、ウナギじゃなくてナマズを釣って、それをたれをかけて食べたらおいしかったです、とても。そんなことをしたこともありました。もう何年もそれは前ですが。少し早送りをしていただきましょう。

これお宅の中で、ちょっとそれじゃとめてください。ああ、ショプラー先生の奥様です、こちらが。こういうことをして楽しんだこともありました。私たちを夕食にお招きくださったんですね。それじゃどうぞ、早送りをまたしてください。

これくらいにしておきましょうか、ＶＴＲは。ありがとうございました。それじゃあとめていただきましょう。ありがとうございました。

＜穏やかなグループホームの空気＞

どうでしょうか、グループホームの雰囲気を、大勢で押しかけたものですから、日常生活をしていらっしゃる自然な雰囲気というのは出なかったかもしれませんが、そのレジェントの方たちは、多くはどこか職場に行っていらっしゃったりしてお留守でありましたけども、穏やかなゆったりとした雰囲気とかですね、自閉症の人たちが我々のところに人なつこく集まってこられる雰囲気はどこへ行ってもそうです。本当にごく平均的なグループホームだと思います、これはですね。で、高機能の人のグループホームも確かにありますです

ね。きょうはそれを時間の都合なんかでお見せしませんでしたが、朝日新聞のＶＴＲをごらんになっていると思いますから、フォーマルないろいろなものは、フォーマルにはもう少しきちっと見ていらっしゃるだろうというふうに思いますので、ちょっとそれじゃあスライドを少しお願いできますか。ちょっとだけごらんに入れようと思います。

＜ノースカロライナ大学＞

ノースカロライナ大学です。中です。先生、どうでしょう、これは非常に象徴的な建物らしいんですが、ノースカロライナ大学はアメリカで最初にできた州立大学だそうであります。私が伺いますと、ジョージア大学とノースカロライナ大学が最も早くできて、どっちが本当に一番だったんだろうというようなことで話し合いが行われるということは聞きましたが、いずれにしろもう随分何年も前に２００周年が終わっていました。とても古い大学であります。

ここがメモリアルなところ。ここへ井戸を掘ったのを最初私は、何かそういう非常に記念すべき場所なんですね。象徴的なものです。これはその当時の一番古い建物を保存してあるんだというふうにお話を伺ったような気がしますが、本当はもっともう近代的な大きな校舎というかビルでありますが。

こういう森の中にありましてね、大学が。こういう森の中、こういうところをリスがね、もうちょろちょろ走っておりますですね。大学の中です。日本の大学ではなかなか感じられないところをちょっとごらんに入れております。

これが TEACCH のビルディングです。TEACCH のある、ここが入り口でありますが。

ショプラー先生と、これは私が一番最初ノースカロライナ大学に伺ったころの自閉症協会、ノースカロライナ自閉症協会の会長さんです。ショプラー先生、まだ若かったでしょう。これ１９８２年の８月２０日、これが最初に私たちが１８年前にノースカロライナを訪問したときのものです。

＜グループホームの部屋など＞

１８年前に。これを、私たちが初めて見せていただいたグループホームです、これが。最初に見せていただいたグループホームです。これがその人たちの部屋でね、この人たちだけ２人で一緒に生活していました。それがいいんだと言っていました。２人で生活したいという希望があるので、２人の部屋にしたと。ほとんどその他の人は１人部屋でした。みんなお１人でした。きれいなお部屋でね、ゆったりして、こういうところを見て、私たち当時１８年前に訪問した人たちは、日本の障害者の、自閉症の人を含めた施設の自分の部屋と比べてやはりショックを受けましたね。きれいな穏やかな静かな部屋で。

これがそのときのお母さんでいらっしゃったですね、お母さん役、グループホームのお母さんで、１８年前、私もこういうふうにちょっと若かったです、まだ。で、学校の先生をしていらっしゃったと聞きました。グループホームのお母さんになる前に何をしていらっしゃいましたと聞きましたら、学校の先生でしたとおっしゃったですね。この仕事を長くずっとお続けになるお気持ちですかと私、伺ったら、あと１年、２年して、大学院に行ってもう一回勉強し直そうと思うと、こういうふうにおっしゃってました。大学院というのは、行って勉強するというのは、この自閉症の人たちに関することを中心に勉強するんですかと聞いたら、そうですと、こうおっしゃってました。それからどうされますと言ったら、またこの世界に戻ってきたいと。TEACCH はそういうふうにこう自由に勉強にも出してくれるし、またカムバックも許してくれるというようなことを言ってらした。それが大変印象的でした。１８年前でありますが、どうしてらっしゃるかなあと思いますですね、この方。

＜構造化の実例＞

構造化、きのうごらんになりました、もうごらんになったとおりでありますが、いくつかの構造

化のところをお見せします。なぜこうするのかということをぜひわかっていただきたいと。こちら側に１人の生徒、この中に、向こう側に１人の生徒、こういうかぎの字といいましょうか、こうすると生徒が入りやすいですね。この辺はもちろん勉強するところ、スタディーエリア、ワークエリアであります。こういうのをごらんくださると、前にこう教材を入れる場所があって、番号がつけてあったりする。いわゆるワークシステム、スタディーシステムですね。自立して活動ができるようにということを援助するための。ここを訪問したときに、ここにはブラインドがおりるようになっているんです。生徒が新しい学級に来たばかりのころは外へ気を奪われて学習に集中できないので、これをこう下げるとおっしゃってました。ちょっとこれを立てておいてあげるだけでこの子はですね、こちらの子や何かに気をとられないで、ある学習に集中できる。要らなくなればこういうのは外すんですが、こういうことをちょっとしておいてあげるだけで、どんなに価値があるかということも先生、おっしゃったですね。こういう木切れ、板切れでぽんと簡単につくってあるだけですが。

これはグループエリアって、グループで学習する場所であります。

小学校ですね。小さい子です。これは、ここがスタディーエリアだと思いますが、勉強する場所だと思いますが、いくつかのコーナーをごらんに入れます。

これは、この子は…この人はスピーチセラピスト、コミュニケーションセラピストで、言葉とかコミュニケーションの練習をしているところです、この子は。こういうところにちょっとこういうものを、屏風のようなもの、日本流に言うと、立てましてね、ここで先生と集中して。これは朝日の人と取材に行ったときでしたから、映像を撮っていらっしゃる場面でありますが、こんな場面がありましたですね。こういうコーナーも設けてある。これでおしまいですかね。ありがとうございました。

物理的構造化の…もうちょっとあったんじゃないでしょうか、スライド。もうありませんですか。それでおしまいだったでしょうか。どうもすいません。失礼しました。ありましたか。じゃあお願いします。これは中学校であります。ここのところが勉強するところ、ワークスタディーのエリア、ここがシステムキッチンが整えられておりまして、冷蔵庫があって、お台所があって、ここでおやつを食べたり何かします。こういう作業、こういう日本の学校ではあまりやらないけれども、家族の人の希望があるそうですね。家事を、ハウスキーピングですね、家事のお手伝いがいろいろできるようにという。ですから大抵の教室にはこういう日本流に言いますとシステムキッチンがありました。

ここが学習する場所であります。こんなふうになってます。ここにこうスケジュールがあって、この三つがもう終わってるということですね。デスクがあって、ここで机に座って勉強と、こういう意味になってます。これはお皿とフォークとナイフのような絵ですが、ここでお昼御飯でしょうか。こういう場面、ここがシステムキッチンがあって、ここに学習する何かがありますね。古い写真なものですから、もうカビが生えそうになって申しわけありませんが。こうやって勉強しているところであります。これがシステムキッチンが並んでいるところ、ここでおやつを食べようとしているところです。中学の生徒です。

これはブレークエリアと言ってますね。休憩室、休息室でしょうか。音楽を聞くのが好きな生徒、パズルをするのが好きな生徒、それぞれいろいろなこと、好きなことをそれぞれやってました。これは先生です。

教室のコーナーではこうやって勉強することもあったりしますし、個別にマン・ツー・マン…これで今度はおしまいでしょうかね。ありがとうご

ざいました。

おわりに

時間が参りましたが、最後のところをちょっと見ておいていただきましょう。このようなプロセスをずっとたどりながら、社会の中で、どれくらい社会資源をどのように利用して、コミュニティーベースで生きていくかと。そういうこう一つずつのスキルをといいましょうか、的確に学んでいって広げていくわけです。

いわばそれは、私がよく日本で自閉症のお母さんたちにお話しすることで、あなたの子どものためにお母さんはできるだけその人に合った、その自閉症の人に、個人に合った生活シナリオをしっかりつくってみてあげてほしいと。お母さんができれば有能なシナリオライターになり、すぐれたディレクターになってということです。私たちはそれを生活ドラマを演じる自閉症の人のディレクターないしシナリオライターを応援するスタッフの一員ですよということをよく言います。すぐれたディレクターはすぐれたスタッフを集めることができると。できれば TEACCH のスタッフのようなスタッフをたくさん自分の周りに配置されるといいと。そうすると自分のお子さんのそれぞれの豊かな生活シナリオが描けて、そしてそのシナリオに合った豊かな生活を演じることができるような演出ができて、その人の器量に合ったシナリオ空間ですか、生活空間、舞台空間を社会の中に広げていくこともできるし、もしかしたら能力に合わせてアドリブをたくさん、あまり細かくシナリオに規定しなくても演じられる状況をたくさん与えることができるかもしれないし、できなければきちんとシナリオに書き込んでおいてあげればいいし、その分だけ。予定どおり事が進行するようにしてあげたらいいし、そんな必要がなければないだけ自由場面をつくってあげたらいいし、そのことは御自身のシナリオを演じることができる、その主演の息子さん、娘さんの能力にもよるというわけです。どのような生活空間を、社会の中にどのように広めていって、共演者や助演者をどのように求めて、そしてそれが、その生活・生涯が完成するために、どういうスタッフを集めればいいか。例えば舞台で比喩的に申し上げればですよ、比喩的なお話ですが、照明係や舞台装置係や共演者や助演者や、いろいろな人を求めるわけです。そういうふうに多くの有能なスタッフを抱えて、そして一人ひとりの生涯を豊かなものに全うしていかれればいいと。TEACCH はこういうアイデアを持っていらっしゃるように私には思います。

ですから、１人ずつがということ、１人ずつに合ったシナリオ、生活というふうな意味でですね、個別性ということを、個別化ということをとても TEACCH は大切にします。自閉症の人には共通した問題が確かにあります。けれども、１人ずつの違いがまた同時にあると。こういうことであります。ですから、TEACCH が言う個別化と、個別性、個別化という問題も非常によくわかりますし、けれども自閉症の人の持っている共通した問題もある。ですから、共通した問題を解決するために、あるいは共通した問題を持ってる人を支援するために構造化というアイデアをとても大切にしますが、けれども、１人ずつが違うと。個別化という。こういうふうなことも大切にしながら TEACCH プログラムは実践されていると、こういうふうに思います。日本の自閉症の人に、我々の文化に合った TEACCH モデルの応用という問題をゆっくり考えてみたいと。皆さんと一緒に考えて実行してみたいというふうに思っているのであります。

一部の方には誤解を解けていただけたか、それから多くの方には、より深い理解に進んでいただけたかどうかというようなことを思っております。どうもありがとうございました。（拍手）